

## 英国労働者協同組合アカウント3から学ぶコミュニティ開発

立教大学コミュニティ福祉学部教授 藤井 敦史

昨年、英国の東ロンドン、タワーハムレッツ区にある労働者協同組合アカウント3にお世話になり、立教大学コミュニティ福祉学部の学生を連れて2週間程度の海外インターンシップを実施した。アカウント3は、現代表のトニー・メレデー氏を含む女性リーダー3人によって1991年に設立された非営利の労働者協同組合であり、バングラディッシュやソマリア等、多様な背景を持つ移民の女性たちの社会的・経済的エンパワメントのために、英語を含む基礎的なスキルの教育、職業訓練・紹介、起業支援、福祉相談、保育サービスの提供といった多様な事業を展開している。我々は、以上のようなアカウント3で、ソマリア人で自らもSITという女性グループを率いるサフィア先生から移民向けの英語クラスで指導を受けながら、アカウント3が地域で共に活動している多様なコミュニティ組織（女性グループや若者グループ）の訪問、ソマリアの子供たちとの交流、ガザの人々を支援するためのファンディングのイベントへの参加等、様々なことを経験した。

我々がアカウント3で学んだことを煎じ詰めて語るとすれば、恐らく、成功している社会的企業の基盤には豊かな連帯経済が形成されているということだと言えるだろう。たとえば、アカウント3は、地域のチャリティ団体、セトルメント、社会運動団体、貧困者向けの公営住宅を管理するハウジング・アソシエーション、協同組合振興機関や中間支援組織等、多様な地域団体とのネットワークを構築しながら、マイクロ・クレジットを含む多くの事業をジョイント・ビジネスやコンソーシアムといった形で開発し、展開してきた。また、アカウント3は、これまでに多くの当事者によるセルフ・ヘルプ組織の組織化や起業をサポートしてきたが、支援対象団体が起業すれば関係が切れるのではなく、サーバーへのアクセスを提供し、管理業務を継続的にサポートしながら、ネットワーク全体として、共に資源をシェアし、コストを削減しながらジョイント・ビジネスを展開してきている。以上のような市民社会のネットワークは、取引関係としても重要な意味合いも持つ。カメルーン政権下、公的資金の流れが弱まる中で、アカウント3にとっては、とりわけハウジング・アソシエーションとの委託契約が、財政的な持続可能性にとって重要な基盤となってきた。このように、アカウント3は、豊富なネットワークのハブとして、ソーシャル・キャピタルを含む多様な資源をシェアし、相互に助け合うことが可能な連帯経済を生み出してきたと言えるだろう。

そして、もう一つ見えてきたことは、以上のような連帯経済を生み出すためには、個人の成長を継続的に支えるエンパワメントのプロセスを作り出すことが重要な意味を持っているということである。アカウント3では、多様な事業構成をとることで、多層的で有機的なエンパワメントのプロセスを作り出してきたが、それだけでなく、多世代を対象とした事業を展開することで、被支援者との継続的な関係が築かれ、被支援者が成長して、やがて支援する側に回るという循環が見られる。つまり、連帯経済を可能にする人々の参加を生み出すためには、彼らの学びを継続的に支え、自己効力感を上昇させるエンパワメント（主体形成）のプロセスが決定的に重要なのである。

以上、アカウント3で我々が学んできたことについて簡単に説明してきた。こうしたアカウント3の営為は、英国におけるコミュニティ開発の真髄と言ってもいいものだろう。コミュニティ開発とは、一言でいえば、地域社会において、何らかの社会問題にぶつかった人々が、問題を共有化し、相互に学習を深め、集団化・組織化（場合によっては事業化）していくプロセスを促進していくことで、当事者の心理的・社会的・経済的・政治的エンパワメントを図っていく営為を意味している。最近、日本でも、米国のオバマ大統領がコミュニティ・オーガナイザーだったことに触発されて、コミュニティ・オーガナイジングが紹介されるようになってきたが、コミュニティ・オーガナイジングもコミュニティ開発の中の一つの類型と言えるだろう。そして、とりわけ日本のNPOや協同組合が学ぶべきことは、同質的な結合を越えて、異質な組織や機関との連携を作り出していくことが重視されている点にある。多様な移民が暮らす東ロンドンで活動するアカウント3も、正に、多様で異質なものをつなぎ合わせることでコミュニティ開発をしてきた。その秘訣が何なのかは、まだまだ見えてきていないが、今後も、インターンシップで学生たちと一緒に学び続けようと思う。

(ふじい あつし)



アカウント3のトニーさん、サフィアさん、そしてインターンシップに参加した学生たちと筆者（右）